

ドイツ語の自動詞における 完了助動詞 sein/haben の選択と 項の「Proto-Rollen の性質」について

野 上 さなみ

1. はじめに

ドイツ語で自動詞の完了形が作られる際、助動詞として sein あるいは haben が選択される。動詞によっては両方の助動詞と組み合わせ可能なものもある：

(1) A. haben のみを選択する自動詞： arbeiten (働く), lachen (笑う), singen (歌う),
schlafen (眠る), bluten (出血する/樹液を出す), spielen (遊ぶ), reden (話す)

B. sein のみを選択する自動詞： gehen (行く), ankommen (到着する), sterben (死ぬ), einschlafen
(寝入る), ausbluten (血/樹液を出し尽くす), rollen (転がる), platzen (破裂する)

C. sein/haben の交替がみられる自動詞： tanzen (踊る), schwimmen (泳ぐ), reiten (乗馬する),
fliegen (飛ぶ), fahren (乗り物で行く), abtrocknen (乾く), gären (発酵する)

この助動詞の選択基準についての意見は、大きく2つに分かれる。1つは動詞の Aktionsart (動作態様)、あるいは動詞句の Aktionalität¹⁾ が助動詞の選択を決定するというものである。もう1つは、いわゆる「非対格の仮説(Unakkusativitätshypothese)」に基づき、動詞の項の主題役割 (Thematische Rolle) に応じて助動詞が決定されるという考え方である。これに従えば、非能格動詞 ((1)A群に相当) は haben を、非対格動詞 ((2)B群に相当) は sein を選択する。本稿では、まずこの二つの見解を紹介しそれぞれの問題点を指摘する。そして、助動詞選択には動詞句の Aktionalität, 項の主題役割の両者が影響を及ぼすこと、さらにこの二つのカテゴリーが、項の持つ「Proto-Rollen の性質」として統合されうること示す。最後に、自動詞の完了助動詞の選択は、項の持つ「Proto-Rollen の性質」に依存すると結論づける。

2. Aktionsart/Aktionalität と助動詞の選択

DUDEN (1998), HENTSCHEL & WEYDT(1990) によれば、自動詞が「継続、未完の過程」を表現する場合には、完了助動詞として haben を選択し、「状態や場所の変化」を表現する場合には sein を選択する。これは、助動詞が自動詞の Aktionsart に応じて選択されるとする考え方で、動詞の意味に Telizität が含まれていれば sein が、含まれていなければ haben が選択される：

(2) a. Wir **haben** gut geschlafen.

(私達はよく眠った。)

atelisch

- | | | | |
|-----|---|-----------------|----------|
| | b. Die Rose hat nur sehr kurz <u>geblüht</u> . | (バラはほんの短い間咲いた。) | atelisch |
| (3) | a. Er ist <u>angekommen</u> . | (彼はやって来た。) | telisch |
| | b. Die Rose ist <u>verblüht</u> . | (バラは枯れた。) | telisch |
| (4) | a. Das Haus hat <u>gebrannt</u> . | (家が焼けた。) | atelisch |
| | b. Das Haus ist <u>verbrannt</u> . | (家が焼失した。) | telisch |

この考え方に従えば、(1)C群の自動詞では文脈によって sein/haben の交替があるのはなぜかが説明できる。DUDEN(1998)によれば、運動を表す動詞では動詞の表す動作の継続やプロセスに重点が置かれる場合 haben が用いられ、位置変化に重点が置かれる場合には sein が用いられる。EISENBERG(1999, s.109)によれば、これらの動詞に方向を規定する前置詞が伴わない場合には haben の選択が可能であるけれども、方向を規定する前置詞句が伴うと、必ず sein が選択される：

- | | | | |
|-----|--|--------------------|----------|
| (5) | a. Matthias hat/ist <u>im See geschwommen</u> . | (Matthiasは湖で泳いだ。) | atelisch |
| | b. Matthias ist <u>zum Ufer geschwommen</u> . | (Matthiasは岸まで泳いだ。) | telisch |
| | c. Sie hat/ist <u>stundenlang getanzt</u> . | (彼女は何時間も踊った。) | atelisch |
| | d. Sie ist <u>auf die Bühne getanzt</u> . | (彼女は舞台に踊り出た。) | telisch |

つまり、(5)a, c. のように方向規定の前置詞句が伴わない時には、動詞句全体が atelisch なので haben の選択が可能であるけれども、b, d. のように方向規定の前置詞句が伴うと、動詞句全体が telisch になるために sein しか選択され得ない、と結論づけることができる。

しかし(6)では、a. の動詞句は atelisch であり b. の動詞句は telisch であって明らかに Aktionsität の相違があるにもかかわらず、どちらも sein を選択し、haben は用いられない：

- | | | | |
|-----|---|------------------|----------|
| (6) | a. Der Ball ist <u>im Garten gerollt</u> . | (ボールは庭の中を転がった。) | atelisch |
| | b. Der Ball ist <u>in den Garten gerollt</u> . | (ボールは庭の中へと転がった。) | telisch |

また、運動を表す自動詞の一部では、方向規定の前置詞句を伴わない場合にも、sein のみを選択し haben を選択しない傾向が高まっていることが指摘されている：

- | | | |
|-----|--|-------------------------|
| (6) | c. Wir sind <u>den ganzen Tag geschwommen/geklettert/geritten</u> . | (DUDEN: 1998) |
| | | (私達は一日中泳いだ/よじ登った/乗馬した。) |
| | d. Ich bin <u>30 Minuten lang gelaufen</u> . | (私は30分間走った。) |

(6)c,d. では下線部の前置詞句が示すように、どの動詞句も atelisch であるにもかかわらず、sein が選択される傾向が高まっているということである。これらは、動詞句の Telizität が sein を選択させているという考え方に対する反例である。

自動詞の完了助動詞が動詞句の Aktionsität のみに基づいて決定されるという考えに従うと、(6)のような例でなぜ sein/haben の交替が起きないのか、さらになぜ動詞句が telisch でない場合にも sein のみを選択する傾向が高まって来ているのかを説明することができない、という問題が残る。

3. 項の主題役割と助動詞の選択

WUNDERLICH(1985, S.205) は、自動詞を項の主題役割に応じて Agens-動詞/ Thema-動詞 に分類し、Agens-動詞 は haben を、Thema-動詞 は sein を選択するとしている：

- (7) Agens-動詞: Thea **hat** getanzt, gelacht, geträumt. (Thea は踊った、笑った、夢を見た。)
Thema-動詞: Thea **ist** gefallen, eingeschlafen, gekommen. (Thea は転んだ、寝入った、来た。)

この考え方に従えば、なぜ(6) a, b. が動詞句の Aktionalität とは無関係に sein のみを選択するのか説明できる。項 *der Ball* は Thema であって haben を選択させるに十分な Agens 性を備えていない。よってたとえ動詞句が *atelisch* であっても sein しか選択され得ない。

(1)C群の動詞についても、項の Agens 性と関連づければ sein/haben の交替がうまく説明できる。DUDEN(1998) は、動詞 *fliegen* (飛ぶ), *fahren* (乗り物で行く) では、主語がパイロットや運転手として解釈される文脈では haben が選択され、乗客として解釈されるときには sein が選択される、としている。つまり、項が Agens として解釈されると haben が、Thema として解釈されると sein が選択される。*tanzen* (踊る), *schwimmen* (泳ぐ), *reiten* (乗馬する) なども、項自身の内部に自らの動きを生み出す能力が備わっている動詞なので、これらの動詞の項は (6)の *der Ball* のように、動きが外部からの力に依存するタイプの項に比べると Agens 性が高いと言える。これらの動詞が方向規定の前置詞句を伴わない時((5) a, c)には、動詞の表す動作の継続・進行が重視されるとともに、項は自分自身の動作の「内的な引き起こし手」、つまり Agens として認識される。ゆえにこの場合には haben が選択される。しかし方向規定の前置詞句を伴うと((5) b, d.) 場所の変化が重視されて、項は「変化の被り手」、つまり Thema として認識されるために、sein が選択される。

しかし、完了助動詞が項の主題役割にのみ依存しているという考え方にも問題がある。例えば、(1)C群のうち、項を Agens として解釈し得ない動詞、*abtrocknen* (乾く), *gären* (発酵する) などにおいても sein/haben の交替が見られる：

- (8) a. Nach dem Regen **ist/hat** es schnell wieder abgetrocknet. (雨の後、乾くのがはやかった。)
b. Er **ist/hat** rasch gealtert. (彼ははやく老けこんだ。)
c. Der Wein **ist/hat** gegoren. (ワインが発酵した。)

これらは漸次進行する状態変化を表現し、変化の進行あるいはプロセスが重視されるときには haben が、変化によって項が新しい状態に達するという事実が重視されるときには sein が選択されると DUDEN(1998) は説明している。これらの例に関しては、助動詞の交替を項の Agens 性と結び付けて論じるには無理がある。むしろ動詞の表現する変化そのものがどのように認識されるのか、すなわち動詞の意味内の Telizität がどれくらい強く認識されるのかということが助動詞選択の決め手になっていると言える。さらに、(9)のような動詞のペアにおいては、sein/haben の交替があるにもかかわらず、動詞の Aktionsart の違いはあっても、項の Agens 性の相違があるとはいいがたい：

- (9) a. Das Baby hat geschlafen. (赤ちゃんは眠った。) atelisch

a'. <u>Das Baby ist eingeschlafen.</u>	(赤ちゃんは寝入った。)	telisch
b. <u>Der Gumibaum hat geblutet.</u>	(ゴムの木は樹液を出した。)	atelisch
b'. <u>Der Gumibaum ist ausgeblutet.</u>	(ゴムの木は樹液を出し尽くした。)	telisch

逆に、(10) a,a'. および b,b' の項の間には明らかに Agens 性の相違があると考えられるにもかかわらず、この相違は助動詞の選択に影響を及ぼさずどちらの場合にも sein しか選択されない。ゆえに、WUNDERLICH に従えば、4つの項はすべて Thema であるということになる。しかし、この場合にはむしろ、動詞の Aktionsart (telisch) が項の主題役割とは無関係に sein を選択させているという考え方の方がより説得力があろう：

(10) a. <u>Das Paket ist</u> angekommen.	(荷物が着いた。)	Thema
a'. <u>Der Gast ist</u> angekommen.	(客が到着した。)	Agens
b. <u>Der Zug ist</u> abgefahren.	(汽車が出発した。)	Thema
b'. <u>Der Gast ist</u> abgefahren.	(客が出発した。)	Agens

(10)の例が項の主題役割によって説明し切れない原因は、Agens/Thema それぞれの定義がはっきりしないところにある。さらに(11)では、a,b. の項は Agens で c,d. の項は Thema であると言えるだろうか？これらの項はすべて Thema と判断すべきであろう。つまり項の主題役割に相違は見られないにもかかわらず、*klingseln* (鳴る), *nützen* (役に立つ) は必ず haben を、*auffallen* (目につく), *gelingen* (うまくゆく) は必ず sein を選択する：

(11) a. <u>Das Telefon hat/*ist geklingelt.</u>	(電話が鳴った。)	Thema
b. <u>Das Buch hat/*ist genützt.</u>	(その本は役に立った。)	Thema
c. <u>Seine Brille ist/*hat aufgefallen.</u>	(彼の眼鏡は目についた。)	Thema
d. <u>Der Plan ist/*hat gelungen.</u>	(その計画はうまくいった。)	Thema

a,b. の動詞と c,d. の動詞の相違はむしろ Aktionsart であり(a,b. の動詞は atelisch、c,d. の動詞は telisch)、この Aktionsart の相違が異なる助動詞を選択させていると考えるべきであろう。つまり、*auffallen* は、対象が意識に強い印象を与えて目立つものとして認識される前と後とで、*gelingen* では、対象が望ましい結果をもたらす前と後とでそれぞれコントラストがある。いずれの動詞も後者の側の状態に意味の力点があると考えられるわけである(EISENBERG: 1999, s.109)。

以上の考察から、自動詞の完了助動詞の決定には動詞の Aktionsart (または動詞句の Aktionalität) あるいは項の主題役割のどちらか片方だけではなく、両方のカテゴリーが影響を及ぼす²⁾、という結論が導き出される。さらに、主題役割を用いて助動詞の選択を説明するためには、Agens/Thema それぞれの定義をより明確にする必要があるということもわかる。

4. 動詞句の Aktionalität と 項の持つ「Proto-Rollen の性質」

ここでは、Aktionalität と 項の主題役割の関係を明確にし、助動詞の選択について両者

を考慮した単一の基準を考えて行きたい。まず、項を *Agens* か *Thema* かという主題役割のどちらか一方に分類する、という厳密な二分法をやめて、DOWTY(1991) に従い、項の備え持つ様々な性質を考慮して、*Agens* としての性質をより多く備えていれば *Proto-Agens* として、*Patiens* としての性質をより多く備えていれば *Proto-Patiens* として判断することにしたい。*Proto-Agens*, *Proto-Patiens* がそれぞれ備えているべき性質は以下のとおりである：

(12) *Proto-Agens* の性質

1. 意図をもって出来事、状態に参加すること。
2. 知覚、感覚力があること。
3. 出来事、または他の参加者の状態変化を引き起こすこと。
4. (他の参加者に比べて)動きがあること。
5. その存在が、動詞の表現する出来事に依存していないこと。)

Proto-Patiens の性質

1. 状態変化を被ること。
2. 状態変化が漸次進行すること。
3. 状態変化が他の項に引き起こされること。
4. 他の項に比べて動きが少ないこと。
5. 自己の存在が出来事に依存すること、あるいは全く存在しないこと。) (DOWTY: 1991, s.572)

「*Proto-Agens* / *Patiens* の性質」を用いることの利点は、動詞句の性質 *Telizität* が「*Proto-Patiens* の性質」の一つ (1. 状態変化を被ること) として組み込まれているところにある。つまり、助動詞の選択基準としてともに考慮すべきと判断された2つのカテゴリーが、単一の基準として統一され得るということである。これらの性質と関連づけて第2、3節で問題になった例をもう一度検証していく。その際の出発点として、次のように仮定する：

- (13) 完了助動詞 *sein/haben* の選択は、項の持つ「*Proto-Agens* および *Proto-Patiens* の性質」のバランスによって決定される。「*Proto-Agens* の性質」は *haben* の選択を、「*Proto-Patiens* の性質」は、*sein* の選択を促す。

4.1. *Telizität* と項が被る状態変化の質について

まず運動を表す動詞では、項が動作の進行中常に場所の移動という一種の状態変化を被っている。これは「*Proto-Patiens*の性質」の1.に相当し、これは動詞句全体の解釈が *telisch/atelisch* いずれの場合にも共通の性質である：

- | | | |
|--|-----------|----------|
| (5) a. <u>Matthias</u> hat/ist im See geschwommen. | (状態変化を被る) | atelisch |
| b. <u>Matthias</u> ist zum Ufer geschwommen. | (状態変化を被る) | telisch |
| (6) a. <u>Der Ball</u> ist im Garten gerollt. | (状態変化を被る) | atelisch |
| b. <u>Der Ball</u> ist in den Garten gerollt. | (状態変化を被る) | telisch |

(5), (6)の項の意味論的な相違は、その運動を引き起こす要因³⁾が項自身の内部にあるのかそれとも外部にあるのかという点にある。(5)の項 *Matthias* は、その運動に外的要因を必要とせず、自分自身でその運動を引き起こす力を持っているので、「*Proto-Agens*の性質」の

3.を備えていると言える。つまり、単一の項の中に「引き起こし手」としての側面と「状態変化の被り手」としての側面の両方が備わっている、ということである⁴⁾。一方、(6)の項 *der Ball* は、その運動が項の外部にある要因によって引き起こされるので、「Proto-Patiensの性質」の1.と3.を備えている。項の「Proto-Patiensの性質」を +PAT, 「Proto-Agensの性質」を +AGと表すことにする：

- (5) a. *Matthias hat/ist im See geschwommen.* +PAT (状態変化を被る) / +AG (外的要因なし)
 b. *Matthias ist zum Ufer geschwommen.* +PAT (状態変化を被る) / +AG (外的要因なし)
 (6) a. *Der Ball ist im Garten gerollt.* +PAT (状態変化を被る) / +PAT (外的要因あり)
 b. *Der Ball ist in den Garten gerollt.* +PAT (状態変化を被る) / +PAT (外的要因あり)

以上の性質をふまえて各動詞句の意味構造を次のように仮定する：

- (5) a'. *im See schwimmen:* (DO(x)) CAUSE (BECOME(BE(x))) 外的要因なし
 b'. *zum Ufer schwimmen:* (DO(x)) CAUSE (BECOME(BE^{DEF}(x))) 外的要因なし
 (6) a'. *im Garten rollen:* [x CAUSE] (DO(y) + BECOME(BE(y))) 外的要因あり
 b'. *in den Garten rollen:* [x CAUSE] (DO(y) + BECOME(BE^{DEF}(y))) 外的要因あり

(5)a. では項の「引き起こし手」としての +AG ゆえに *haben* の選択が可能であり、「状態変化の被り手」としての +PAT が強調されるときには *sein* が選択されるときと考えることができる。(5)b. のように方向規定の前置詞句が加わって特定の結果状態が明確に表現されると必ず *sein* が選択されることから、「状態変化を被る」という +PAT が *sein* 選択の決め手となるためには、動詞句全体に *Telizität* を与えられるような「“特定の”結果状態を含む」状態変化でなければならない、ということがわかる。(5)b', (6)b'. では、動詞句の意味構造の中に“特定の”結果状態が含まれていることを明示するために結果状態を「BE^{DEF}」としてある。この結果状態が特定のものであるか否かという質の相違は、+PAT の強さの違いとして捉えることができる。結果状態が BE^{DEF} の場合には BE の場合と比較すると項の +PAT がより強く、たとえ同時に *haben* の選択を促す力のある +AG がその項に備わっていたとしても、それを阻んで必ず *sein* を選択させる原因となっていると考えることができる。(6)a',b'. で “x CAUSE” の部分を[]に入れてあるのは、外的要因があるけれどもそれが項として表現されてはいないことを示すためである。(6)a,b. の項では +AG が皆無で +PAT が二つ備わっているために、動詞句の *Telizität* すなわち「項が被る状態変化が特定の結果状態を含むかどうか」とは無関係に *sein* しか選択され得ないと考えることができる。

(6)c,d. の例が示すように、運動を表現する自動詞に方向規定が伴わない場合にも *sein* のみが選択される傾向が高まっていることは既に第2節で指摘した。この現象は次のように解釈したい。「状態変化を被る」という項の +PAT が *sein* を選択させようとする力が強まってきているために、たとえその状態変化が「特定の」結果状態を伴っていない場合にも、*haben* を選択させようとする +AG の作用を抑えこみ *sein* を選択させる傾向が高まってきている。

漸次進行する状態変化を表現する自動詞に関しては、動詞句の解釈にバリエーションがあり、それに応じて *haben/sein* の使い分けがされている例に注目したい。(14)ではいずれの例でも項が何らかの状態変化を被っており、かつこの変化が漸次進行するので、いずれの項も2つの +PAT を備えている：

- (14) a. Der Wein **hat** gegoren. (ワインが発酵した。)
 +PAT(状態変化を被る) / +PAT(状態変化が漸次進行する)
- b. Der Wein **ist** zu Essig gegoren. (ワインが発酵して酢になった。)
 +PAT(状態変化を被る) / +PAT(状態変化が漸次進行する)
- 例文：DAL(1966, s.124)

漸次進行する状態変化を表現する動詞の特徴は、項が絶間なく状態変化にさらされており、この変化は必ずしも「特定の」結果状態に達する必要があるという点にある。a. では特定の結果状態は含意されておらず、この場合には *haben* が選択される。これに対して b. では、特定の結果状態が前置詞句 *zu Essig* によって明確に表現されており、この場合には *sein* が選択される。ここでさらに留意すべきことは、a. では *atelisch* な解釈が可能であるのに対して、b. では動詞句が必ず *telisch* に解釈されるという事実である⁹⁾：

- (15) a. Der Wein **hat** drei Tage lang gegoren, aber danach nicht mehr. *atelisch*
 (ワインは三日間発酵し、その後は発酵しなかった。)
 +PAT(状態変化を被る) / +PAT(状態変化が漸次進行する) / 特定の結果状態なし
- b. Der Wein **ist** in drei Tagen zu Essig gegoren. (ワインは発酵して三日で酢になった。) *telisch*
 +PAT(状態変化を被る) / +PAT(状態変化が漸次進行する) / 特定の結果状態あり

つまり、状態変化そのものが必ず *sein* を選択させる要因として働くためには、この状態変化が特定の結果状態を含意していることが条件であり、さらに「特定の結果状態がある」ということが動詞句の *Telizität* として把握されるということが、これらの例からもわかる。

しかし、漸次進行する状態変化を表現する自動詞のうち大部分のものでは *sein/haben* の交替は見られず、*sein* のみを選択する：

- (16) a. Der Fluß **ist**/***hat** gefroren. (川が凍った。)
- b. Die Wurst **ist**/***hat** verdorben. (ソーセージが腐った。)
- c. Die Titanik **ist**/***hat** versunken. (タイタニックが沈んだ。)

項が +PAT の 1. と 2. をともに備えているこれらの自動詞の大部分では、「Proto-Patiens の性質」の強さゆえに *sein* が選択されるということが出来る。しかし(8), (14)のように、項が +PAT の 2. を備えているためにかえって *haben* が選択される例があることから、「状態変化が漸次進行する」という性質(+PAT の 2.)は、項の被る状態変化が「特定の結果状態に達する」という性質と比較した場合、*sein* を選択させる力が弱いと言わざるをえない。

4. 2. 「Proto-Rollen の性質」間の強弱関係

運動を表現する自動詞のうち、運動の方向があらかじめ語彙内に組み込まれているいわゆる *direction verb* (LEVIN & RAPPAPORT HOVAV: 1992)では、項の +AG に影響されることなく必ず *sein* が選択される。(10)の例を用いて、各項の +AG / +PAT を示す：

(10) a. Das Paket ist angekommen. +PAT(外的要因あり) / +PAT(状態変化を被る) (+方向規定)

a'. Der Gast ist angekommen. +AG(外的要因なし) / +PAT(状態変化を被る) (+方向規定)

(10) a'. 項は a. の項に比べて「Agens としての性質」が高いけれども、この +AG ゆえの *sein/haben* の交替は見られない。さらに副詞句 *absichtlich* (わざと、意図的に)を加えて項の +AG をもっと高めてみても、この +AG の強さも *sein/haben* の交替を引き起こさない：

(17) a. Der Taucher ist absichtlich gesunken. (潜水夫は わざと 沈んだ。)

+AG(外的要因なし) / +AG(意図あり) / +PAT(状態変化を被る) (+方向規定)

b. Das Schiff ist gesunken. (船は沈んだ。)

+PAT(外的要因あり) / +PAT(状態変化を被る) (+方向規定)

ここでは、語彙的に動詞の意味構造に含まれている運動の方向規定が、項のもつ +AG が *haben* を選択させようとする力を阻んで、必ず *sein* を選択させると考えることができる。TENNY(1987) は、*direction verb* の意味構造の中に語彙的に含まれているこの方向規定が Telizität として機能するという考え方を提案している。これに従うと、Telizität として機能する語彙的な方向規定が、非常に強い +PAT として作用するために、+AG による *haben* の選択が阻まれると言える。前置詞句によって明確に表現される方向規定がある運動の動詞の例(5)も考え合わせると、次のように結論づけることができる。運動を表す動詞における「方向規定」は、運動によってもたらされる結果状態が特定のものを示す。

「状態変化が特定の結果状態に達する」という性質は、*haben* を選択させようとする +AG の力を抑えこむだけの強い +PAT として作用し必ず *sein* を選択させる。

従来 Aktionsart/Aktionalität の相違ゆえに助動詞の選択に相違が見られるとされて来た自動詞のペアも、「Proto-Rollen の性質」という側面からもう一度検証してみる。以下の3つのペアでは、動詞の Aktionsart が atelisch な a. は *haben* のみを、telisch な b. は *sein* のみを選択する。b. の項に比べて a. の項がより強い +AG を持ち合わせているとは言えない。つまり、a. が *haben* を選択するのは「項が強い +AG を備えているため」ではない。しかし各ペアの動詞の間に見られる Aktionsart (telisch/atelisch) の相違は、項が状態変化を被るかかどうかという +PAT の有無として捉えなおすことが可能である。a. にはこの +PAT が無く、b. には有る。しかもこれが特定の結果状態を含む状態変化なので、極めて強い +PAT として *sein* の選択を促す。同時に b. ではこの +PAT の作用を阻むに足る +AG を項が備えていないために、必ず *sein* が選択される。逆に a. の項には「特定の結果状態に至る状態変化を被る」という +PAT が無く、*sein* の選択に十分な +PAT が欠けているために *haben* が選択される：

- (18) a. Das Baby **hat** geschlafen. -PAT(状態変化を被る)
 b. Das Baby **ist** eingeschlafen. +PAT(状態変化を被る) / (特定の結果状態あり)
- (19) a. Die Rose **hat** nur sehr kurz geblüht. -PAT(状態変化を被る)
 b. Die Rose **ist** verblüht. +PAT(状態変化を被る) / (特定の結果状態あり)
- (20) a. Das Haus **hat** gebrannt. -PAT(状態変化を被る)
 b. Das Haus **ist** verbrannt. +PAT(状態変化を被る) / (特定の結果状態あり)

(11)a,b. も、各「Proto-Rollen の性質」が助動詞選択に及ぼす影響力に差があることを示す例である。*das Telefon, das Buch* には +AG が見られない。いづれの出来事も状態変化を含むわけではないけれども、「電話が鳴る」という出来事は通話者によって「引き起こされる」もので、「本が役に立つ」という出来事も本の著者にその原因があると考えることができる。つまり出来事にこれらの項以外の外的要因があるという意味で、(11)a,b. の項 *das Telefon, das Buch* はむしろ +PAT を備えていると言うことができる：

- (11) a. Das Telefon **hat**/***ist** geklingelt. (電話が鳴った。) +PAT(出来事が引き起こされる)
 b. Das Buch **hat**/***ist** genutzt. (その本は役に立った。) +PAT(出来事が引き起こされる)

にもかかわらず、この2つの自動詞では *sein* ではなく必ず *haben* が選択されることから、「Proto-Rollen の性質」と助動詞の選択の間の関係について次のように結論づけたい。完了の助動詞として必ず *sein* が選択されるための条件としては、項が Proto-Patiens として認識されるだけでは不十分である。+PAT が十分に高いときにのみ必ず *sein* が選択される。(11)の例で *haben* が選択されるのは、項の +AG が十分に高いからではなく、+PAT の強さが不十分であるために *sein* が選択され得ないからである、と考えるべきである。

項の備え持つ「Proto-Rollen の性質」すべてが助動詞の選択に同等な影響力を持つわけではなく、項が状態変化を被り、かつこの状態変化が特定の結果状態を含むことが +PAT の中でも *sein* の選択に特に強い影響を与えること、この +PAT が *haben* の選択を促す +AG の力を阻むだけの強い性質であることが以上の例から明らかになった。

5. 結論

動詞句の Aktionalität と項の主題役割という2つのカテゴリーは、項の持つ「Proto-Rollen の性質」として1つの概念に統合されることを示した。完了助動詞 *sein/haben* の選択は、項の備えている「Proto-Agens / Proto-Patiens の性質」のバランスによって決定される。

「Proto-Agens の性質」は *haben* の選択を促し、「Proto-Patiens の性質」は *sein* の選択を促す。これらの性質のうちすべてがおなじ度合で助動詞の決定に関与するわけではない。「Proto-Patiens の性質」の中では、「特定の」結果状態を含む状態変化を被ることが *sein* の選択に最も強い影響を及ぼす。項がこの性質を持ち合わせるときには、「Proto-Agens の性質」が *haben* を選択させようとする力が抑制されて必ず *sein* が選択される。項にこの性質が備わっていない場合には、「Proto-Patiens の性質」が不十分であるがゆえに、*haben* が選

扱される、あるいは haben の選択が可能である。また運動を表す自動詞に関しては、運動の「方向規定」が、haben を選択させようとする「Proto-Agens の性質」の力を阻んで sein を選択させる。

参考文献

- Andersson, S-G. (1972): *Aktionalität im Deutschen. Eine Untersuchung unter Vergleich mit dem russischen Aspektsystem I*. Uppsala.
- Dal, I. (1966): *Kurze deutsche Syntax, auf historischer Grundlage*. Tübingen.
- Duden 4, Grammatik (1998): Drosdowski, G. (Hrsg.). Mannheim / Wien / Zürich
- Dowty, D.R. (1991): Thematic proto-roles and argument selection. In: *Language* 67, s.547-619.
- Ehrich, V.(1996): *Verbbedeutung und Verbsemantik: Transportverben im Deutschen*.
In: Lang, E. & Zifonum, G. (Hrsg.): *Deutsch - Typologisch*. Berlin / New York.
- Eisenberg, P. (1999): *Grundriss der deutschen Grammatik. Band 2. Der Satz*. Stuttgart / Weimar.
- Hentschel, E. & Weydt, H. (1990): *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin / New York.
- Kemmer, S. (1994): Middle voice, transitivity and the elaboration of events. In: Fox, B. & Hopper, P.J. (eds.): *Voice, Form and Function*. Amsterdam / Philadelphia. s.179-230.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1992): The lexical semantics of verbs of motion: the perspective from unaccusativity. In: Roca, I. (ed.): *Thematic structure: its role in grammar*. Berlin / New York. s.247-269.
- Tenny, C.L. (1992): Aspectual Interface Hypothesis. In: Sag, I.A. & Szabolsci, A. (eds.): *Lexical Matters*. Stanford, CA: SLA 24. s.1-27.
- Winkler, S. (1994): *Secondary predication in English: a syntactic focus-theoretical approach*, Arbeitspapiere des Sonderforschungsbereichs 340, "Sprachtheoretische Grundlagen für die Computerlinguistik." Stuttgart.
- Wunderlich, D. (1985): Über die Argumente des Verbs. In: *Linguistische Berichte* 97. s.183-227.

註

- 1) 動詞単独の意味における限界付けの有無を表すには "Aktionsart" を、動詞とその他の文成分（前置詞句、目的語など）が組み合わされてできる動詞句全体における限界づけの有無を表すには ANDERSSON(1972) に従い "Aktionalität" を用いる。
- 2) 自動詞の完了助動詞の選択には Aktionsart と項の主題役割の両方が関わっているという考えは、EHRICH (1996) でも指摘されている。本論ではこの2つのカテゴリーを1つの基準として統一して考えるところに EHRICH との相違点がある。
- 3) LEVIN & RAPPAPORT HOVAV(1992) は、運動を引き起こす要因が項の外部にある場合、これを "direct external cause" と表現している。本論ではこの概念を「"外的要因"の有無」として取り扱っている。
- 4) KEMMER(1994) 参照。
- 5) WINKLER(1994) 参照。